

耕縁自豊

NO. 77 西畑亮一

8月31日の深夜、あるテレビ番組のインタビューの中で、自らの戦争体験を踏まえた「一枚のハガキ」という映画を完成させた99歳の藤原兼人監督が、若者に対して次のように、静かにしかし熱く語ってくれました。若者と言っても、監督の年齢からすればだいたいの方が「若者」になるでしょう。だから、みなよく聴いてほしい。私が理解したその要旨は、福島原発で騒いでるけど、騒ぎ方が足りない。そして・・・戦争はアカン！戦争は政治で起こる。政治で生活が決まる。一人ひとり生活者として、政治にもっと関心を持ってほしい。単に関心を持つだけでなく、自分自身のいのちが懸かっていると思って実際に行動してほしい、というものでした。

私はこの監督の熱い話を聴いて、マルクスの「フォイエルバッハに関するテーゼ」を思い出した。それは「フォイエルバッハに関するテーゼ」の最後のテーゼ(命題)で、「哲学者たちは世界をさまざまに解釈してきたにすぎない。だが大切なのは、世界を変革することだ」という有名なものです。監督がこれに倣ったかどうかはともかく、切に伝えたい監督の想いは、私たちは人間らしい暮らしぶりにもっと強い欲求を持たねばならない。人間らしい、そして自分らしい暮らしぶりとは？「若者」よしっかり考えているのか。これまでの教育に、正解があるかどうかはわからない。むしろ見直すべきであり、仮りに正解に近いものがあるとしても、それは過去に学びつつ自らの生活体験の中から、日々新たに自分で発見するものだ。そのためには自らの内なる声に従い自分を信じて行動せよ、ということじゃないだろうか。そしてまたこの名文句は応用範囲が広い。マルクス自身の言説にも適用できるし、既存の知識体系を揺さぶり自分なりに人と人との世界を言い換える際にもバッチリ使える。例えばこれまでマルクスはあれこれ解釈されてきただけだ。肝心なのは、マルクスが描いた世界観を現実的に変えることだってね。

良くも悪くも社会の諸現象は、すべて自分自身の暮らしに直結しているものとして受け止め、気に入らなければ行動して態度でハッキリ示せと、監督は「若者」に火を点けてくれていると私は理解した。今の、「若者」には熱がない。唯一無二の自分の暮らしを人が用意したものでそのまま代用している。が、それでほんとうにいいのか。たった一度だけの人生、他者と共に自身も生きる社会なのに、行動どころか解釈さえしていない。当事者として、すべて社会のことはいのち懸けなこととして受け止め、頭で考えているだけでなく実際に行動せよと、監督は漢垂れ小僧の「若者」に求めている。原発問題で実際に行動している人にして、その程度じゃ駄目だ。もっともっとチカラを入れよと、励ましてくれているようだった。戦争を生きた99歳のことはには迫力があつた。その勢いは、今にも車椅子から立ち上がってテレビから出て来そうだった。特に熱不足の私だから、まるで私に向かって怒っているように思えた。その番組は、偶然見たつもりだったが、そうではなかったようだ。

「一枚のハガキ」は監督最後の作品らしいが、精神の若さを保とうとする者たちが監督からのメッセージをそれぞれに酌み取って行動してこそ、この作品は完結するのではないだろうか。今年10月4日で100歳の日野原重明さんも、次のように語ってくれている。「体を動かして若返ろう」ってね。そうだ、そうだよ。監督の声が聴こえるよ、立つんだ「若者」！と。自ら体を動かして、さぁ行動しよう。

まさにそんな若者が！「将来を想うハンガーストライキ」…9月11日より19～22歳の男女4人の若者が経済産業省の前で10日間の断食をして、原発について考えようと訴えました。対立ではなく対話をと、静かに、朗らかに、そして明確に、でも柔らかく表現した彼らの大人さそして美しさに感動しました。多くの方が彼らに共感して、連日経産省前は対話の場が開かれましたよ！若者すてきだった！今回ちょうど東京へ行った際にたずねてきました。(惟)

